

どば 土馬

8世紀



下鉤東・蜂屋遺跡 shimomagarihigashi・hachiya

名 前：土 馬

年 齢：約 1300 歳

体 長：顔から尻尾までの長さが 16.6cm、腰から後脚の先端が 8.6cm。

体 重：326g

材 質：陶器 土馬には高温の窯で焼かれた須恵器製品と、低温で素焼きの土師器製品があり、これまでに市内で見つかった7点の土馬はいずれも土師器製品でしたが、この土馬は須恵器製品です。

スタイル：前脚二本、後脚一本、下アゴ、左耳の先端を欠損していますが、全体像がよく分かります。鞍や手綱などの馬具を写実的に表現した「飾馬」。目や鼻孔には粘土粒を貼り付けてひょうきんに仕上げるなど、作者のこだわりが感じられます。

評 価：滋賀県内で約90頭の仲間がありますが、トップクラスの優れた作品です。



▲土馬の出土状況 2013年7月5日撮影



▲土馬が出土した川の調査風景



▲土馬発見



▲下鉤東遺跡古代寺院 瓦の出土状況



▲土師器製の土馬 (上) 手原遺跡 (下) 岡遺跡 東東歴史民俗博物館

土馬 古墳時代の5世紀に現れ平安時代の10世紀代に消滅する馬形の土製品です。土馬を用いる祭祀については、墓前祭祀・水霊祭祀・防疫祭祀があったとされています。

水霊祭祀 稲作には多量の水が必要です。しかし田植えや稲の生育時期に雨が充分降らないことは度々あり、困った人々は神仏に雨乞いの祈願を行いました。

雨乞いには、大陸から伝わった神祭りの影響で牛馬が使われましたが、特に馬は神の乗り物と考えられ神聖視されました。『日本書紀』には、「日照りが続き、牛馬を殺し神社の神に捧げ、読経して仏に祈ったが効き目が無く、ついに天皇が川上で祈ると大雨になった」という記事があるように、馬をイケニエにする雨乞いが行われていたことが分かります。また、『続日本紀』には日照りの時には降雨の祈願に黒毛馬を、長雨の時には止雨の祈願に白馬を水神に捧げた記事が度々記載されています。

しかし雨乞いのたびに大切な馬を殺すのは困難であり、土馬などで代用されるようになったようです。奈良時代にはすでに板に馬を描いた「絵馬」も現れ、現在見る様々な図柄の絵馬の始まりとなっています。

下鉤東・蜂屋遺跡の土馬は河川跡から出土したので、やはり水神に降雨を祈って捧げられたと考えられます。出土地点は下鉤東遺跡古代寺院の北東50m、8世紀の官衙である手原遺跡にも近く、公的な祭祀で使用されたと考えられます。



▲雨乞いと雨止みに霊験あらたかな貴船神社の絵馬